

ぎだゆう座

偶数月の
一日・二日は

十二月公演 恒例！ 忠臣蔵

二〇二五年 十二月一日（月）・二日（火）

【開場】 十八時 【開演】 十八時三〇分

【一日（月）】

仮名手本忠臣蔵

〔浄瑠璃〕

〔三味線〕

鶴が岡兜改めの段

竹本 孝矢

鶴澤 三響

恋歌の段

竹本 綾一

鶴澤 津賀佳

力弥上使の段

竹本 京之助

鶴澤 弥々

本蔵松切の段

竹本 越里

鶴澤 駒治

増補忠臣蔵

本蔵下屋敷の段

竹本 越孝

鶴澤 三寿々

【三日（火）】

仮名手本忠臣蔵

〔浄瑠璃〕

〔三味線〕

文使いの段

竹本 佳之助

鶴澤 津賀榮

殿中刃傷の段

竹本 越京

鶴澤 津賀花

裏門の段

竹本 京之助

鶴澤 朔弥

増補忠臣蔵

本蔵下屋敷の段

竹本 越孝

鶴澤 三寿々



【ところ】 お江戸上野広小路亭 TEL | 03-3833-1789 (11:00~19:00、不定休)

- ・JR 山手線 御徒町駅北口より徒歩 3 分
- ・東京メトロ銀座線 上野広小路駅 A4 出口より徒歩 1 分
- ・都営地下鉄大江戸線 上野御徒町駅 A4 出口より徒歩 1 分

【入場料】 前売 | 2,000 円 18 歳未満 | 1,000 円 当日 | 2,500 円

【お申し込み】 (E-mail) jyogi.gidayuza@gmail.com

【お問い合わせ】 一般社団法人義太夫協会 TEL | 03-6264-3047 (平日 10:00~17:00)

HP | <https://www.gidayu.or.jp>

【主催】 ぎだゆう座

【共催】 永谷商事株式会社

ぎだゆう座



【1日】

鶴が岡兜改めの段

天下を平定した足利尊氏は、暦応元年二月鶴が岡の造営が完了したのを機に実弟直義を鎌倉に差し向け新田義貞の兜を八幡宮の宝蔵に納めよとの命を下しました。奉納の是非をめぐる高師直と若狭助が対立するなか塩谷判官がその場を収めます。また、かつて後醍醐天皇の女官だった顔世御前を呼び出し、唐櫃の中から後醍醐天皇より贈られた義貞の兜を選び出させるのです。

恋歌の段

高師直はかねてより思いを寄せる塩谷判官の妻顔世御前に恋文を渡します。顔世は恋文を捨てて帰ろうとしますが、しつこく師直が言い寄るところへ、桃井若狭助がやって来て顔世の難を救います。その意趣返しとして高師直が若狭助をさんざんに辱めます。腹に据えかねた若狭助が高師直に切りかかりろうとした時、直義の帰館が告げられ、思い止まります。

力弥上使の段

若狭助の家老加古川本蔵の娘小浪は塩谷判官の家老大星由良助の一子力弥と許嫁の仲。力弥は高師直よりの翌日未明の登城命令を、母戸無瀬の代理の小浪に、使者の礼儀を崩さず申し伝えます。

本蔵松切の段

若狭助は、家老加古川本蔵に、翌日登城したら師直を斬る覚悟だと打ち明けます。本蔵は庭前の松の枝を一太刀に払い落とし「この通りに」と若狭助に勧めます。しかし、若狭助が奥へ入るや直ぐさま本蔵は馬に飛び乗り師直の屋敷へ向かうのでした。

《お客様へのお願い》

- ＊ 1階入り口で履物を脱いでご入場いただきますので、スリッパなど必要な方はご持参ください。
- ＊ マスクの着用を推奨しております。
- ＊ 37.5℃以上の発熱のある方、それ以外でも咳・痰の症状があるなど体調の悪い方は来場をお控え下さい。
- ＊ 演奏中の許可のない録音・撮影は、お断り申し上げます。

【2日】

文使いの段

塩谷判官が早野勘平を供に登城しました。そこへ顔世御前の腰元おかるが来て、顔世御前から託された和歌の入った文箱を高師直に渡すため、塩谷判官に届けて欲しいと頼みます。実は、おかるが使いを乞い受けたのです。おかるには、お使いを口実として恋仲の勘平に逢うことが一番の目的でした。おかるに言い寄る高師直の家来鷺坂伴内を簡単にあしらひ、おかると勘平は、しばしの逢瀬を楽しむために連れ立って行きます。

殿中刃傷の段

(これまで：登城に先がけ西の御門で師直に追いついた本蔵は、進物を並べ師直の機嫌を取ります。その後、塩谷判官が早野勘平を供に登城。腰元おかるは、顔世御前から師直への文箱を届けに来ます。勘平は判官から師直に渡せばよいと、おかるを待たせます。)

「おのれ師直、真二つ」と意気込む若狭助の前に現れた師直は、前日とは違って変わって低姿勢。若狭助はすっかり拍子抜けして、刀を抜くことができずその場を去ります。

さて、判官が顔世からの文箱を師直に手渡すと、中には新古今の歌。師直は恋のかなわぬしるしと悟り、判官に散々当てこすりを言い、判官は腹にすえかね師直に斬りつけてしまいます。判官を抱きとめたのは、次の間に控えていた本蔵でした。

裏門の段

勘平はおかるとの逢瀬の最中、塩谷判官による高師直への刃傷沙汰を耳にし、裏門へ駆け戻ります。主人の大事に居合わせなかったことを恥じた勘平は、追いついたおかるに腹を切って詫言いますが、おかるに止められます。勘平は、鷺坂伴内を追い散らし、二人はおかるの在所山崎へと落ちて行くのでした。

【両日】

増補忠臣蔵 本蔵下屋敷の段

明治に入ってから作られたと言われる作者不詳の作品。桃井家の家老・加古川本蔵を主人公とした外伝的な物語です。

(これまで：主人桃井若狭助が高師直を討つのを賄賂を使って防ぎ、また師直に切りつけた塩谷判官を抱き留めた本蔵は、その為に若狭助の怒りを買ひ、下屋敷にて謹慎しています。そこに若狭助の家来井浪伴左衛門は若狭助と本蔵を諸共に殺そうと企み、茶の湯の釜に毒薬を入れますが、本蔵は釜の毒に気づいています。)

若狭助より本蔵成敗の御錠があり、本蔵は伴左衛門によって縄を打たれ奥庭へ引き出されます。ついに若狭助が刀を抜きますが、斬ったのは伴左衛門の首でした。実は本蔵の本意は若狭助に届いており、成敗されることなく暇を与えられます。山科に向かう本蔵が名残に吹く尺八に、若狭助の妹三千歳姫の琴が合わせ、強い信頼関係に結ばれた主従の別れとなります。